

EXBOUND: 多出力 AND-EXOR 論理式最小化プログラム

神田 徳夫

徳山工業高等専門学校
情報電子工学科

〒745 徳山市久米高城 3538

笹尾 勤

九州工業大学情報工学部
電子情報工学科

〒820 飯塚市大字川津 680-4

あらまし

本論文は、多出力 AND-EXOR 論理式 (ESOP) の積項数の下界とそれを用いた ESOP の最小化法について述べている。まず、多出力関数を多値入力 1 出力関数と考えることにより、多出力 ESOP の積項数の下界を評価する方法を与える。次に、この下界を用いた多出力 ESOP の単純化アルゴリズムを与える。最後に、本アルゴリズムによって、10 変数までの乱数関数およびいくつかの算術演算回路の ESOP の最小性が保証できることを示す。

和文キーワード 組み合わせ論理回路 排他的論理和 論理式最小化

EXBOUND: A Minimization Program for AND-EXOR Expressions for Multiple output Functions

Norio KODA

Department of Computer Science
and Electronic Engineering

Tokuyama College of Technology
Tokuyama 745, Japan

Tsutomu SASAO

Department of Computer
Science and Electronics

Kyushu Institute of Technology
Iizuka 820, Japan

Abstract

This paper presents properties of Exclusive-OR Sum-of-Products expression (ESOP) for multiple output function and their simplification algorithm. First, lower bounds on the number of products in minimum ESOP (MESOP) for multiple output function are shown. Then, an algorithm to simplify ESOPs and to prove their minimality is presented. Experimental results for arithmetic functions and randomly generated functions for up to 10 variables are shown.

英文 key words combinational circuit, Exclusive-Or sum-of-products, logic minimization

1 まえがき

最近のLSIは回路が非常に複雑になっており、論理回路の設計を自動的に行う論理自動合成システムが必須となっている。一般の論理回路は、AND、OR、NOTを基本論理素子として設計される。しかし、算術演算回路や誤り訂正回路などでは、AND、OR、NOTのみで構成するよりも、EXORゲートを併用するとゲート数を大幅に削減できる。そのため、AND、OR、NOTの他にEXORを併用した論理回路の自動合成システムを開発する必要がある。

EXORゲートを含む論理回路自動合成システムにおいては、AND-EXOR形論理式(ESOP)の最小化あるいは単純化プログラムが必要となる。しかし、ESOPの最小化問題はきわめて困難である。入力変数の個数が少ない場合は網羅的あるいは非常に時間がかかる方法により最小解が得られる^{(5),(10),(15)}。入力変数の個数が5以下の場合、これらの関数をLP同値類に分類し、その同値類の代表関数の最小ESOPを用いて、任意の5変数以下の関数の最小ESOPを高速に求める方法が提案されている⁽¹⁴⁾。しかし、変数の個数が多い場合は、一般には最小化は困難であり、ヒューリスティックなアルゴリズムによって単純化を行うことにより、準最小解を得ている^{(3),(8)}。しかし、ヒューリスティックな単純化アルゴリズムは、その単純化結果の最小性を保証しない。

筆者らは、先に、与えられた関数の最小ESOPの積項数の下界を評価することにより、1出力関数のESOPの単純化結果の最小性を保証する方法を提案し、4変数関数の最小ESOPを用いて5変数関数のESOPの最小化が可能であることを示した^{(11),(13)}。本論文では、多出力関数の最小ESOPの積項数の下界の評価法を提案し、これを用いた多出力関数のESOPの単純化法を与える。次に、5変数関数の最小ESOPの積項数を利用することにより、1出力10変数関数で積項数が19程度のESOPの単純化およびその最小性の証明が可能であることを示す。また、代表的な多出力回路である算術演算回路に関して、最小性を証明できることを示す。

2 定義

本章では、諸定義について述べる。

[定義1] X を $P = \{0, 1, \dots, p-1\}$ のいずれかの値をとる変数とする。 $S \subseteq P$ 、 $S \neq \emptyset$ とするとき、 X^S を X のリテラルとよび、

$$X^S = \begin{cases} 1 & (X \in S \text{ のとき}) \\ 0 & (X \notin S \text{ のとき}) \end{cases}$$

と定義する。 S の要素の個数が1個の場合、 $X^{(i)}$ を X^i と表す。 $p=2$ のとき、 $x^0 = \bar{x}$ 、 $x^1 = x$ 、 $x^{\{0,1\}} = x^2 = 1$

と表す。

リテラルの論理積 $X_1^{S_1} X_2^{S_2} \dots X_n^{S_n}$ を積項という。

[定義2] 積項をORで結合した式をAND-OR形論理和形(SOP)という。また、積項をEXORで結合した式をAND-EXOR形論理和形(ESOP)という。与えられた論理関数 f を表現する積項数最小のSOPを最小SOP(MSOP)という。また、与えられた論理関数 f を表現する積項数最小のESOPを最小ESOP(MESOP)という。

[定義3] ESOP論理式 F の積項数を $\tau(F)$ 、 f のMESOPの積項数を $\tau(f)$ で表す。

[定義4] n 変数関数のMESOPの積項数の最大値を $\psi(n)$ で表す。

[定義5] ⁽⁸⁾ 写像 $f : P_1 \times P_2 \times \dots \times P_n \rightarrow B$ 、 $P_i = \{0, 1, \dots, p_i - 1\}$ 、 $B = \{0, 1\}$ を多値入力2値出力関数という。

[定義6] 多値入力2値 m 出力関数を

$$f_i(X_1, X_2, \dots, X_n) \quad (i = 0, 1, \dots, m-1)$$

とする。このとき、

$$\begin{aligned} F(X_1, X_2, \dots, X_n, X_{n+1}) \\ = \bigvee_{i=0}^{m-1} X_{n+1}^{(i)} \cdot f_i(X_1, X_2, \dots, X_n) \end{aligned}$$

を多出力関数 $(f_0, f_1, \dots, f_{m-1})$ の特性関数という。ここで、 X_{n+1} は、出力部を表す m 値変数である。

特性関数 F では、入力と出力の組み合わせが、元の多出力関数で許されるとき、 $F = 1$ となり、許されなるとき、 $F = 0$ となる。

[注意1] ⁽⁸⁾ 多出力関数を表現するESOPを最小化すること、与えられた多出力関数の特性関数を表現するESOPを最小化することは等価である。従って、多出力関数のESOPの最小化問題は、その多出力関数の特性関数を求めることにより、多値入力2値1出力関数のESOPの最小化問題として考えることができる。

[例1] 表1は、2値2入力3出力関数 (f_0, f_1, f_2) を示している。この関数の特性関数は表2のようになる。特性関数 F のMESOPは、図1のカルノー図より、

$$F = X_1^{(1)} \cdot X_2^{(1)} \oplus X_3^{(2)}$$

となる。従って、3出力関数 (f_0, f_1, f_2) のMESOPは

$$\begin{aligned} f_0 &= f_1 = X_1^{(1)} \cdot X_2^{(1)} \\ f_2 &= X_1^{(1)} \cdot X_2^{(1)} \oplus 1 \end{aligned}$$

となる。

表 1: 多出力関数

x_1	x_2	f_0	f_1	f_2
0	0	0	0	1
0	1	0	0	1
1	0	0	0	1
1	0	0	0	1
1	1	1	1	0

表 2: 特性関数

X_1	X_2	X_3	F
0	0	0	0
0	0	1	0
0	0	2	1
0	1	0	0
0	1	1	0
0	1	2	1
1	0	0	0
1	0	1	0
1	0	2	1
1	1	0	1
1	1	1	1
1	1	2	0

3 MESOPの積項数の下界

本章では、与えられた関数を表現するMESOPの積項数の下界について考察する。

[定義7] n 変数論理関数 $f(x_1, x_2, \dots, x_n)$ において、

$$\tau(a_{11}, a_{12}, \dots, a_{1q}) = \tau(f(a_{11}, a_{12}, \dots, a_{1q})),$$

$$\tau(a_{11}, a_{12}, \dots, a_{1q} : a_{21}, a_{22}, \dots, a_{2q} : \dots$$

$$: a_{p1}, a_{p2}, \dots, a_{pq}) = \tau\left(\sum_{i=1}^p \oplus f(a_{i1}, a_{i2}, \dots, a_{iq})\right)$$

と表す。ここで、

$$f(a_{i1}, a_{i2}, \dots, a_{iq}) = f(a_{i1}, a_{i2}, \dots, a_{iq}, x_{q+1}, x_{q+2}, \dots, x_n),$$

$a_{ij} \in \{0, 1\}$, $i = (1, 2, \dots, p)$, $j = (1, 2, \dots, q)$ である。

[定理1] ⁽¹³⁾ n 変数論理関数 f において、 $\tau(f) \geq L1$ が成立する。ここで、 $L1 = \{\tau(0) + \tau(1) + \tau(0 : 1)\}/2$ である。

[補題1] ⁽¹³⁾ n 変数論理関数 f において、 $\tau(f) \geq L2$ が成立する。ここで、

$$L2 = \{\tau(0, 0 : 0, 1) + \tau(0, 0 : 1, 0) + \tau(1, 1 : 0, 1) + \tau(1, 1 : 1, 0)\}/2 \text{ である。}$$

[定義8] $\mathbf{a} = (0, 0, 0)$, $\mathbf{b} = (0, 0, 1)$, $\mathbf{c} = (0, 1, 1)$, $\mathbf{d} = (0, 1, 0)$, $\mathbf{e} = (1, 1, 0)$, $\mathbf{f} = (1, 1, 1)$, $\mathbf{g} = (1, 0, 1)$, $\mathbf{h} = (1, 0, 0)$ とする。このとき、 $\{\mathbf{a}, \mathbf{b}\}$ や $\{\mathbf{c}, \mathbf{d}\}$ は、 B^3 上で1次元の立方体を形成するので、1-cube という。また、 $\{\mathbf{a}, \mathbf{b}, \mathbf{c}, \mathbf{d}\}$ や $\{\mathbf{e}, \mathbf{f}, \mathbf{g}, \mathbf{h}\}$ は、2次元の立方体を形成するので、2-cube という。また、 $\{\mathbf{a}, \mathbf{b}, \mathbf{c}, \mathbf{d}, \mathbf{e}, \mathbf{f}, \mathbf{g}, \mathbf{h}\}$ は3次

		$X_1 X_2$			
		00	01	11	10
X_3	0			1	
	1			1	
	2	1	1		1

図 1: 特性関数のカルノー図

(例題終)

元の立方体を形成するので、3-cube という。一般に、 B^n の節点の部分集合が k 次元の立方体を形成するとき、これを k -cube という。また、 B^n の各節点は、0-cube である。

[補題2] n 変数論理関数 f において、 $\tau(f) \geq L22$ が成立する。ここで、

$$L22 = \{\tau(0, 0) + \tau(0, 1) + \tau(1, 0) + \tau(1, 1) + \tau(0, 0 : 0, 1) + \tau(0, 0 : 1, 0) + \tau(1, 1 : 0, 1) + \tau(1, 1 : 1, 0) + \tau(0, 0 : 0, 1 : 1, 0 : 1, 1)\}/4$$

$$= \left\{ \sum_{\mathbf{a} \in B^2} \tau(\mathbf{a}) + \sum_{\substack{\{\mathbf{a}, \mathbf{b}\} \text{ は } 1\text{-cube} \\ \mathbf{a}, \mathbf{b} \in B^2}} \tau(\mathbf{a} : \mathbf{b}) + \tau\left(\sum_{\mathbf{a} \in B^2} \oplus f(\mathbf{a})\right) \right\} / 4$$

である。

(証明) 付録1参照。

[補題3] ⁽¹³⁾ n 変数論理関数 f において、 $\tau(f) \geq L3$ が成立する。ここで、

$$L3 = \{\tau(0, 0, 0 : 0, 0, 1) + \tau(0, 0, 0 : 0, 1, 0) + \tau(0, 0, 0 : 1, 0, 0) + \tau(0, 1, 1 : 0, 0, 1) + \tau(0, 1, 1 : 0, 1, 0) + \tau(0, 1, 1 : 1, 1, 1) + \tau(1, 0, 1 : 0, 0, 1) + \tau(1, 0, 1 : 1, 0, 0) + \tau(1, 0, 1 : 1, 1, 1) + \tau(1, 1, 0 : 0, 1, 0) + \tau(1, 1, 0 : 1, 0, 0) + \tau(1, 1, 0 : 1, 1, 1)\}/4 \text{ である。}$$

[補題4] n 変数論理関数 f において、 $\tau(f) \geq L32$ が成立する。ここで、

$$L32 = \left\{ \sum_{\mathbf{a} \in B^3} \tau(\mathbf{a}) + \sum_{\substack{\{\mathbf{a}, \mathbf{b}\} \text{ は } 1\text{-cube} \\ \mathbf{a}, \mathbf{b} \in B^3}} \tau(\mathbf{a} : \mathbf{b}) + \sum_{\substack{\{\mathbf{a}, \mathbf{b}, \mathbf{c}, \mathbf{d}\} \text{ は } 2\text{-cube} \\ \mathbf{a}, \mathbf{b}, \mathbf{c}, \mathbf{d} \in B^3}} \tau(\mathbf{a} : \mathbf{b} : \mathbf{c} : \mathbf{d}) + \tau\left(\sum_{\mathbf{a} \in B^3} \oplus f(\mathbf{a})\right) \right\} / 8 \text{ である。}$$

(証明) 補題2と同様にして証明できる。

[補題5] n 変数論理関数 f において、 $\tau(f) \geq L4$ が成立する。ここで、

$$L4 = \left\{ \sum_{\mathbf{a} \in B^3} \tau(\mathbf{a}) + \sum_{\substack{\{\mathbf{a}, \mathbf{b}\} \text{ は } 1\text{-cube} \\ \mathbf{a}, \mathbf{b} \in B^4}} \tau(\mathbf{a} : \mathbf{b}) \right\}$$

$$\begin{aligned}
& + \sum_{\substack{\{a, b, c, d\} \text{ は } 2\text{-cube} \\ a, b, c, d \in B^4}} \tau(a : b : c : d) \\
& + \sum_{\substack{\{a, b, c, d, e, f, g, h\} \text{ は } 3\text{-cube} \\ a, b, c, d, e, f, g, h \in B^4}} \tau(a : b : c : d, e, f, g, h) \\
& + \tau\left(\sum_{a \in B^4} f(a)\right)/16 \text{ である.}
\end{aligned}$$

(証明) 補題 2 と同様にして証明できる.

$L1 \sim L4$ は、2 値入力 1 出力関数の ESOP の積項数の下界の評価に利用できる。 $\psi(2) = 2$, $\psi(3) = 3$, $\psi(4) = 6$, $\psi(5) = 9$, $\psi(n) = 2^{n-2} (n \geq 6)$ であるから⁽¹²⁾, これらの下界の最大値の比較は表 3 のようになる。

[補題 6] $M = \{0, 1, \dots, m-1\}$ とし, $A \subseteq M$, $A \neq \emptyset$ とし, A の要素を奇数個含む M の部分集合を $E(A)$ とする。 $\alpha(A)$ を任意の関数とすると, 次式が成立する.

$$\sum_{A \subseteq M} \sum_{E(A) \subseteq M} \alpha(E(A)) = 2^{m-1} \sum_{A \subseteq M} \alpha(A).$$

[例 2] $m = 2$ のとき,

$$\begin{aligned}
& \sum_{E(\{0\})} \alpha(E(\{0\})) + \sum_{E(\{1\})} \alpha(E(\{1\})) + \sum_{E(\{0,1\})} \alpha(E(\{0,1\})) \\
& = [\alpha(\{0\}) + \alpha(\{0,1\})] + [\alpha(\{1\}) + \alpha(\{0,1\})] \\
& \quad + [\alpha(\{0\}) + \alpha(\{1\})] \\
& = 2[\alpha(\{0\}) + \alpha(\{1\}) + \alpha(\{0,1\})].
\end{aligned}$$

$m = 3$ のとき,

$$\begin{aligned}
& \sum_{E(\{0\})} \alpha(E(\{0\})) + \sum_{E(\{1\})} \alpha(E(\{1\})) + \sum_{E(\{2\})} \alpha(E(\{2\})) \\
& \quad + \sum_{E(\{0,1\})} \alpha(E(\{0,1\})) + \sum_{E(\{0,2\})} \alpha(E(\{0,2\})) \\
& \quad + \sum_{E(\{1,2\})} \alpha(E(\{1,2\})) + \sum_{E(\{0,1,2\})} \alpha(E(\{0,1,2\})) \\
& = [\alpha(\{0\}) + \alpha(\{0,1\}) + \alpha(\{0,2\}) + \alpha(\{0,1,2\})] \\
& \quad + [\alpha(\{1\}) + \alpha(\{0,1\}) + \alpha(\{1,2\}) + \alpha(\{0,1,2\})] \\
& \quad + [\alpha(\{2\}) + \alpha(\{0,2\}) + \alpha(\{1,2\}) + \alpha(\{0,1,2\})] \\
& \quad + [\alpha(\{0\}) + \alpha(\{1\}) + \alpha(\{0,2\}) + \alpha(\{1,2\})] \\
& \quad + [\alpha(\{0\}) + \alpha(\{2\}) + \alpha(\{0,1\}) + \alpha(\{1,2\})] \\
& \quad + [\alpha(\{1\}) + \alpha(\{2\}) + \alpha(\{0,1\}) + \alpha(\{0,2\})] \\
& \quad + [\alpha(\{0\}) + \alpha(\{1\}) + \alpha(\{2\}) + \alpha(\{0,1,2\})] \\
& = 2^2[\alpha(\{0\}) + \alpha(\{1\}) + \alpha(\{2\}) + \alpha(\{0,1\}) \\
& \quad + \alpha(\{0,2\}) + \alpha(\{1,2\}) + \alpha(\{0,1,2\})].
\end{aligned}$$

[定理 2] 多値入力関数を

$$f(x_1, x_2, \dots, x_k, Y) : B^k \times M \rightarrow B,$$

$M = \{0, 1, \dots, m-1\}$, $B = \{0, 1\}$ とするとき, $\tau(f) \geq Lm$ が成立する. ここで,

$$Lm = 2^{-m+1} \sum_{A \subseteq M} \tau(f(A)),$$

$$f(A) = \sum_{i \in A} f(|Y = i), \text{ また, } \sum_{A \subseteq M} \text{ は,}$$

空でない M の全ての部分集合に関する和である.

(証明) f の MESOP を

$$F = \sum_{A \subseteq M} Y^A G(A) \quad (1)$$

とする. ここで, $G(A)$ は, x_1, x_2, \dots, x_k だけからなる ESOP である. (1) において, 変数 Y に定数 i を代入すると,

$$F(|Y = i) = \sum_{i \in B \subseteq M} G(B)$$

を得る. 上式と $f(A)$ の定義より,

$$f(A) = \sum_{i \in A} \sum_{i \in B \subseteq M} G(B) = \sum_{E(A) \subseteq M} G(E(A)) \quad (2)$$

ここで, $E(A)$ は, A の要素を奇数回含む集合, と変形できる. (2) の積項数に関して,

$$\tau(f(A)) \leq \sum_{E(A) \subseteq M} \tau(G(E(A)))$$

を得る. これより,

$$\sum_{A \subseteq M} \tau(f(A)) \leq \sum_{A \subseteq M} \sum_{E(A) \subseteq M} \tau(G(E(A))) \quad (3)$$

が成立する. ところで, 補題 6 より,

$$\sum_{A \subseteq M} \sum_{E(A) \subseteq M} \tau(G(E(A))) = 2^{m-1} \sum_{A \subseteq M} \tau(G(A))$$

が成り立ち, また (1) の積項数に関して,

$$\tau(f) = \sum_{A \subseteq M} \tau(G(A))$$

が成立するので, (3) より,

$$\sum_{A \subseteq M} \tau(f(A)) \leq 2^{m-1} \tau(f)$$

を得る. これより, 定理が成立する.

(証明終)

定理 2 は, 多値入力関数の MESOP の積項数の下界を与える. 注意 1 より, 定理 2 の変数 Y を多出力関数の出力部を表す多値変数と考えることにより, 定理 2 を, 多出力関数の MESOP の積項数の下界の評価に利用できる. また, 与えられた関数が 2 値入力多出力関数の場合, 関数 $f(A)$ は 2 値入力 1 出力関数となるので, $f(A)$ の ESOP の積項数の評価には下界 $L1 \sim L4$ が利用できる.

[系 1] n 入力 m 出力関数 $f_i : B^n \rightarrow B$

($i = 0, 1, \dots, m-1$) の ESOP の積項数に関して, 次の関係が成立する.

$m = 2$ のとき,

$$\tau(f) \geq 2^{-1}[\tau(f_0) + \tau(f_1) + \tau(f_0 \oplus f_1)].$$

$m = 3$ のとき,

$$\tau \geq 2^{-2}[\tau(f_0) + \tau(f_1) + \tau(f_2) + \tau(f_0 \oplus f_1)]$$

表 3: 下界の最大値の比較

n	$L1$	$L2$	$L22$	$L3$	$L32$	$L4$	$L_n^*)$
6	14	12	14	9	11	11	14
7	≤ 24	18	21	18	21	16	21
8	≤ 48	≤ 32	≤ 36	27	31	31	31
9	≤ 96	≤ 64	≤ 72	≤ 48	≤ 54	46	46
≥ 10	$\leq 3 \cdot 2^{n-3}$	$\leq 2^{n-3}$	$\leq (9/8) \cdot 2^{n-3}$	$\leq (3/4) \cdot 2^{n-3}$	$\leq (27/32) \cdot 2^{n-3}$	$\leq (81/128) \cdot 2^{n-3}$	$9 \cdot (3/2)^{n-5}$

*) 後述

$$+ \tau(f_0 \oplus f_2) + \tau(f_1 \oplus f_2) + \tau(f_0 \oplus f_1 \oplus f_2)].$$

$m = 4$ のとき,

$$\begin{aligned} \tau(f) \geq & 2^{-3}[\tau(f_0) + \tau(f_1) + \tau(f_2) + \tau(f_3) \\ & + \tau(f_0 \oplus f_1) + \tau(f_0 \oplus f_2) + \tau(f_0 \oplus f_3) \\ & + \tau(f_1 \oplus f_2) + \tau(f_1 \oplus f_3) + \tau(f_2 \oplus f_3) \\ & + \tau(f_0 \oplus f_1 \oplus f_2) + \tau(f_0 \oplus f_1 \oplus f_3) \\ & + \tau(f_0 \oplus f_2 \oplus f_3) + \tau(f_1 \oplus f_2 \oplus f_3) \\ & + \tau(f_0 \oplus f_1 \oplus f_2 \oplus f_3)]. \end{aligned}$$

[定義 9] n 変数論理関数 f において, 各変数のリテラルが 1 個だけ含まれている積項を最小項という. 関数 f に含まれる最小項を f の最小項という. f の最小項の集合を $M(f)$ で表す. また, $v \in M(f)$ とし, v および v を含む積項の集合を $E(v)$ で表す.

[補題 7] 多値入力関数を

$$f(x_1, x_2, \dots, x_k, Y) : B^k \times M \rightarrow B,$$

$$M = \{0, 1, \dots, m-1\}, B = \{0, 1\} \text{ とし, } v \in M(f),$$

$q_i \in E(v) (i = 1, 2, \dots, m \cdot 2^k)$ とするとき, $\tau(f) \geq La$ が成立する. ここで,

$$La = 1 + \min_i \{\tau(f \oplus q_i)\}$$

である.

[注意 2] 補題 7 は, 文献 13 の補題 9 の多値入力関数への拡張である. これにより, 下界の値を 1 増やせる可能性がある.

4 ESOP の簡単化アルゴリズム

現在, 6 変数以上の任意の関数の MESOP は容易には得られないので, 表 3 の $L1 \sim L4$ の不等号で示した部分の下界は実際には得られず, 10 変数以上の関数の ESOP の下界の評価ができない. さて, $n (\geq 6)$ 変数関数がある変数で展開すると $(n-1)$ 変数関数の部分関数が得られる. この展開を各部分関数に順次適用することにより, いくつかの 5 変数部分関数が得られる. このことを利用すると, 10 変数以上の関数の ESOP の下界の評価ができる.

<アルゴリズム 1 (下界 L_n) >

```
getlwr(n:number of inputs, f:function)
{
  if(n ≤ 5) then return τ(f);
  tmax = 0;
  for(for all input variables){
    f = x̄ifi0 ⊕ xifi1;
    t0=getlwr(n-1, fi0);
    t1=getlwr(n-1, fi1);
    t2=getlwr(n-1, fi0 ⊕ fi1);
    t = (t1 + t2 + t3)/2;
    if(t > tmax) then tmax = t;
  }
  return tmax;
}
```

下界 L_n の最大値を表 3 の最後の列に示す.

現在迄, 5 変数以下の任意の 2 値入力 1 出力関数を表現する MESOP は, テーブル探索により高速に得る方法が確立されている. しかし, 変数の個数が 6 以上の場合や多出力関数の場合は, これらを表現する MESOP を効率良く求める方法は確立されていない. 一般には, ヒューリスティックなアルゴリズムによって簡単化が行われるが, 簡単化結果の最小性は保証されない. そこで, 前章で検討した, 与えられた関数の ESOP の積項数の下界の評価法と, 5 変数以下の関数の MESOP の表, 及び, ヒューリスティックな簡単化アルゴリズム EXMIN2⁽⁸⁾ を組み合わせることにより, ESOP の簡単化アルゴリズムが得られる.

<アルゴリズム 2 (1 出力関数の ESOP の簡単化) >

```
minin(n:number of inputs, f:function)
{
  if(n ≤ 5) then return MESOP for f;
  for(all input variables){
    f = x̄ifi0 ⊕ xifi1;
    Fi0=minin(n-1, fi0);
```

```

    Fi1=minin(n-1, fi1);
    Fi2=minin(n-1, fi0 ⊕ fi1);
    Gi0=exmin2(x̄iFi0 ⊕ xiFi1);
    Gi1=exmin2(Fi0 ⊕ xiFi2);
    Gi2=exmin2(Fi1 ⊕ x̄iFi2);
}
return Gij where

    τ(Gij) = min{min{τ(Gi0), τ(Gi1), τ(Gi2)}};
}
exmin2(F:ESOP){ return simplified ESOP for F by EXMIN2;}

```

<アルゴリズム3 (多出力関数のESOPの簡単化)>

- 1) 各出力関数のESOPをアルゴリズム2で簡単化する。
- 2) 1で得られたESOPを用いて、与えられた多出力関数の特性関数のESOPを得る。
- 3) 2で得られた特性関数のESOPをEXMIN2で簡単化する。

<アルゴリズム4 (ESOPの最小性保証)>

- 1) 与えられた関数を表現するESOPの積項数の下界を求め、これをLBとする。
- 2) 与えられた関数を表現するESOPをアルゴリズム3で簡単化する。簡単化したESOPの積項数をτ_aとする。
- 3) もしLB = τ_aならば、簡単化したESOPは最小解である。もしLB ≠ τ_aならば、簡単化結果の最小性は保証されない。

5 実験結果

表4は、2値7入力1出力乱数関数をEXMIN2によって簡単化したときの積項数と、各種下界の平均値を示す。これより、下界の比較は、平均すると、Ln > L22 > L2 > L32 > L4 > L3となる。しかし、関数によっては、下界の大きさがこの順とはならない場合がある。

表5は、10変数以下の2値入力1出力乱数関数をアルゴリズム4によって簡単化したときの最小性保証の割合を示す。これより、10変数関数で積項数が19程度までのESOPの最小性の証明ができた。

表6は、多出力乱数関数をアルゴリズム4によって簡単化したときの最小性が保証できた関数の割合を示す。これより、6積項以下のESOPの場合は、比較的高い割合で最小解が得られる。また、代表的な算術演算回路⁽¹⁷⁾のESOPを簡単化した結果を表7に示す。MLP2, ADR2, NRM2及びRDM4については最小性の保証ができた。

なお、アルゴリズム4では、ヒューリスティックな簡単化

プログラムEXMIN2が用いられている。このため、今後のEXMIN2の改善により、本実験結果が変化することがあり得る。

表4: 各種下界の比較 (7変数乱数関数)

積項数	下界の平均					
	L2	L22	L3	L32	L4	Ln
1	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00
2	1.50	2.00	1.50	2.00	2.00	2.00
3	2.51	3.00	2.50	3.00	3.00	3.00
4	3.52	4.00	3.19	4.00	4.00	4.00
5	4.54	5.00	3.80	5.00	4.99	5.00
6	5.51	5.99	4.55	5.95	5.76	5.99
7	6.50	6.97	5.45	6.76	6.30	6.99
8	7.46	7.83	6.11	7.34	6.94	7.97
9	8.30	8.59	6.75	8.02	7.48	8.88
10	9.07	9.22	7.46	8.58	7.96	9.60
11	9.80	9.98	8.09	9.18	8.46	10.34
12	10.42	10.60	8.67	9.71	8.92	11.10
13	10.95	11.20	9.14	10.24	9.37	11.74
14	11.37	11.75	9.56	10.70	9.79	12.33

表5: 最小性が保証できた関数の割合 (%) (1出力関数)

積項数	n=6	n=7	n=8	n=9	n=10
1	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
2	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
3	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
4	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
5	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
6	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
7	100.0	99.2	100.0	100.0	100.0
8	97.3	98.2	100.0	100.0	100.0
9	89.3	90.6	100.0	100.0	100.0
10	78.7	66.6	95.2	100.0	100.0
11	43.7	36.5	93.3	96.2	100.0
12	0.0	11.4	72.2	95.8	100.0
13		3.7	60.0	91.3	100.0
14		0.5	8.0	80.0	100.0
15		0.0	0.0	45.8	100.0
16		0.0	0.0	23.5	83.3
17		0.0	0.0	0.0	83.0
18		0.0	0.0	0.0	66.0
19		0.0	0.0	0.0	9.1
20		0.0	0.0	0.0	0.0

6 むすび

本論文では、従来の2値入力1出力関数のESOPの積項数の下界の評価法を拡張して多出力関数のESOPの積項数の下界の評価法を提案し、多出力関数簡単化アルゴリズム

表 6: 最小性が保証できた関数の割合 (%) (多出力関数)

積項数	4 入力					5 入力					6 入力				
	2 出力	3 出力	4 出力	5 出力	6 出力	2 出力	3 出力	4 出力	5 出力	6 出力	2 出力	3 出力	4 出力	5 出力	6 出力
3	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
4	100.0	92.3	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
5	100.0	92.0	96.0	93.3	100.0	95.8	100.0	100.0	92.9	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
6	94.7	87.0	79.2	76.9	59.1	95.4	84.2	100.0	90.0	61.5	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
7	30.8	63.8	58.6	30.4	20.0	85.7	56.5	64.7	35.3	46.7	100.0	100.0	91.7	100.0	100.0
8	0.0	2.7	0.0	0.0	0.0	60.0	31.8	42.1	0.0	17.6	100.0	100.0	81.3	92.9	100.0
9		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.4	0.0	0.0	0.0	94.4	70.0	86.7	76.9	70.6
10			0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	52.2	37.5	64.3	47.1	41.7
11				0.0	0.0		0.0	0.0	0.0	0.0	26.7	33.3	9.1	4.7	30.0
12								0.0	0.0	0.0	0.0	16.7	4.8	0.0	0.0
13								0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

注) 空欄は、該当する積項数の乱数関数が得られなかったことを示す。

表 7: 算術演算回路の最小化

回路	入力	出力	積項	下界
MLP2	4	4	5	5
MLP3	6	6	18	15
ADR2	4	3	7	7
ADR3	6	4	15	13
NRM2	4	3	7	7
NRM3	6	4	26	17
SQR4	4	8	15	8
SQR6	6	12	38	15
ROT4	4	3	8	7
ROT6	6	4	17	14
LOG4	4	4	10	8
LOG6	6	6	33	19
WGT4	4	3	9	8
WGT6	6	3	22	19
RDM4	4	4	6	6
RDM6	6	6	15	12
INC4	4	5	7	6
INC6	6	7	11	10

を与えた。1 出力関数の場合、10 変数で積項数が 19 程度の E SOP の最小性の保証が可能である。また、多出力関数の場合、代表的な算術演算回路の一部については最小性の保証ができた。現在、E SOP の単純化はヒューリスティックなアルゴリズムによって行われている。しかし、これらのアルゴリズムは単純化結果の最小性を保証しない。これらのアルゴリズムと E SOP の積項数の下界の評価法を組み合わせることにより、効率の良い単純化が可能となる。

謝辞

本研究は、一部文部省科学研究費による。

参考文献

- [1] M.A. Harrison: *Introduction to Switching and Automata Theory*, McGraw Hill, 1965.
- [2] M. Davio, J.P. Deschamps and A. Thayse: *Discrete and Switching Functions*, McGraw-Hill International, 1978.
- [3] M. Helliwell and M. Perkowski: "A fast algorithm to minimize multi-output mixed-polarity generalized Reed-Muller forms", *Proc. of the 25th Design Automation Conference*, pp.427-432, June 1988.
- [4] T. Sasao and P.W. Besslich: "On the complexity of MOD-2 SUM PLA's", *IEEE Trans. on Compl.*, vol.39, No.2, pp.262-266, Feb. 1990.
- [5] M. Perkowski and M. Chrzanowska-Jeske: "An exact algorithm to minimize mixed-radix exclusive sums of products for incompletely specified Boolean functions", *Proc. International Sympo. on Circuits and Systems*, pp.1652-1655, May 1990.
- [6] T. Sasao: "A transformation of multiple-valued input two-valued output functions and its application to simplification of exclusive-or sum-of-products expressions", *Proc. of the 21th International Symposium on Multiple-Valued Logic*, pp.270-279, May 1991.
- [7] T. Sasao: "AND-EXOR expressions and their optimization", in Sasao(ed.) *Logic Synthesis and Optimization*, Kluwer Academic Publishers, pp.287-312, Jan. 1993.
- [8] T. Sasao: "EXMIN2: A simplification algorithm for Exclusive-Or-Sum of products expressions for multiple-valued input two-valued output functions", *IEEE Trans. on CAD* Vol.12, No.5, pp.621-632, May 1993.
- [9] 室賀三郎, 笹尾勤訳: *論理設計とスイッチング理論*, 共立出版 (1981).
- [10] 神田徳夫, 笹尾勤: "4 変数 AND - EXOR 最小論理式とその性質", *信学論 (D-I)*, J74-D-I, 11, pp.765-773 (1991-11).
- [11] 神田徳夫, 笹尾勤: "5 変数 AND - EXOR 論理式の単純化について", 1990 信学秋季全大, SA-3-3, pp.1-288(1990).
- [12] 神田徳夫, 笹尾勤: "AND - EXOR 最小論理式の積項数の上界について", *信学論 (D-I)*, J75-D-I, 3, pp.135-142(1992-3).

- [13] 神田徳夫, 笹尾勲: "下界定理を用いた AND-EXOR 論理式の簡単化法", 信学論 (D-1), J76-D-I, 1, pp.1-10(1993-1).
- [14] 神田徳夫, 笹尾勲: "論理関数の LP 特徴ベクトルとその応用", 信学論 (D-1), J76-D-I, 6, pp.260-268(1993-6).
- [15] T. Sasao: "An exact minimization of AND-EXOR expressions using BDDs", *IFIP WG10.5 Workshop on Applications of Reed-Muller Expansion in Circuit Design*, Sept. 16, 1993.
- [16] N. Koda and T. Sasao: "LP characteristic vector of logic functions", *IFIP WG10.5 Workshop on Applications of Reed-Muller Expansion in Circuit Design*, Sept. 16, 1993.
- [17] 笹尾勲: "PLAの作り方・使い方", 日刊工業新聞社, 1986.

付録

1. 補題2の証明

関数 f の MESOP を F とし, 次のように表されるとする.

$$\begin{aligned} & F(0,0)x^0y^0 \oplus F(0,1)x^0y^1 \oplus F(0,2)x^0y^2 \\ & \oplus F(1,0)x^1y^0 \oplus F(1,1)x^1y^1 \oplus F(1,2)x^1y^2 \\ & \oplus F(2,0)x^2y^0 \oplus F(2,1)x^2y^1 \oplus F(2,2)x^2y^2 \\ & = f(x,y) \end{aligned} \quad (A1)$$

ここで, $f(a,b)$ ($a, b \in \{0,1,2\}$) は, 変数 x も y も含まない ESOP である. 式 (A1) において, $(x,y) = (0,0), (1,1), (0,1), (1,0)$ とおくと,

$$F(0,0) \oplus F(0,2) \oplus F(2,0) \oplus F(2,2) = f(0,0) \quad (A2)$$

$$F(1,1) \oplus F(1,2) \oplus F(2,1) \oplus F(2,2) = f(1,1) \quad (A3)$$

$$F(0,1) \oplus F(0,2) \oplus F(2,1) \oplus F(2,2) = f(0,1) \quad (A4)$$

$$F(1,0) \oplus F(1,2) \oplus F(2,0) \oplus F(2,2) = f(1,0) \quad (A5)$$

を得る. 式 (A2) と (A4) より,

$$F(0,0) \oplus F(0,1) \oplus F(2,0) \oplus F(2,1) = f(0,0) \oplus f(0,1) \quad (A6)$$

を得る. 式 (A2) と (A5) より,

$$F(0,0) \oplus F(0,2) \oplus F(1,0) \oplus F(1,2) = f(0,0) \oplus f(1,0) \quad (A7)$$

を得る. 式 (A3) と (A4) より,

$$F(0,1) \oplus F(0,2) \oplus F(1,1) \oplus F(1,2) = f(1,1) \oplus f(0,1) \quad (A8)$$

を得る. 式 (A3) と (A5) より,

$$F(1,0) \oplus F(1,1) \oplus F(2,0) \oplus F(2,1) = f(1,1) \oplus f(1,0) \quad (A9)$$

を得る. 式 (A2) ~ (A5) より,

$$\begin{aligned} & F(0,0) \oplus F(0,1) \oplus F(1,0) \oplus F(1,1) \\ & = f(0,0) \oplus f(0,1) \oplus f(1,0) \oplus f(1,1) \end{aligned} \quad (A10)$$

を得る. $\tau(F(a,b)) = \tau_F(a,b)$ とすると, 式 (A2) ~ (A10) より,

$$\tau_F(0,0) + \tau_F(0,2) + \tau_F(2,0) + \tau_F(2,2) \geq \tau(0,0),$$

$$\tau_F(1,1) + \tau_F(1,2) + \tau_F(2,1) + \tau_F(2,2) \geq \tau(1,1),$$

$$\tau_F(0,1) + \tau_F(0,2) + \tau_F(2,1) + \tau_F(2,2) \geq \tau(0,1),$$

$$\tau_F(1,0) + \tau_F(1,2) + \tau_F(2,0) + \tau_F(2,2) \geq \tau(1,0),$$

$$\tau_F(0,0) + \tau_F(0,1) + \tau_F(2,0) + \tau_F(2,1) \geq \tau(0,0 : 0,1),$$

$$\tau_F(0,0) + \tau_F(0,2) + \tau_F(1,0) + \tau_F(1,2) \geq \tau(0,0 : 1,0),$$

$$\tau_F(0,1) + \tau_F(0,2) + \tau_F(1,1) + \tau_F(1,2) \geq \tau(1,1 : 0,1),$$

$$\tau_F(1,0) + \tau_F(1,1) + \tau_F(2,0) + \tau_F(2,1) \geq \tau(1,1 : 1,0),$$

$$\tau_F(0,0) + \tau_F(0,1) + \tau_F(1,0) + \tau_F(1,1) \geq \tau(0,0 : 0,1 : 1,0 : 1,1)$$

を得る. 上の9個の不等式を加えると,

$$\begin{aligned} & 4\{\tau_F(0,0) + \tau_F(0,1) + \tau_F(0,2) + \tau_F(1,0) \\ & + \tau_F(1,1) + \tau_F(1,2) + \tau_F(2,0) + \tau_F(2,1) + \tau_F(2,2)\} \\ & \geq \tau(0,0) + \tau(0,1) + \tau(1,0) + \tau(1,1) + \tau(0,0 : 0,1) \\ & + \tau(0,0 : 1,0) + \tau(1,1 : 0,1) + \tau(1,1 : 1,0) \\ & + \tau(0,0 : 0,1 : 1,0 : 1,1) \end{aligned}$$

を得る. また,

$$\begin{aligned} \tau(f) &= \tau_F(0,0) + \tau_F(0,1) + \tau_F(0,2) + \tau_F(1,0) + \tau_F(1,1) + \\ & \tau_F(1,2) + \tau_F(2,0) + \tau_F(2,1) + \tau_F(2,2) \end{aligned}$$

である. これより, 補題を得る.

(証明終)